〔東京家政大学研究紀要　第30集 (1), p. 57～64, 1990〕

ロバート・シューマン作曲「謝肉祭」Op. 9 についての一考察

浅　見　英　夫

（平成元年9月30日受理）

Study of Carnival Op. 9 by Robert Schumann

Hideo ASAMI

(Received September 30, 1989)

はじめに

19世紀，ロマン主義音楽の作曲家，ロバート・シューマンは1810年，ドイツのザクセン，ツヴィッカウに生れ，1856年，エンデニヒの精神病院で没している．

同時代の作曲家にはフンメル（1778～1837），モーシュレス（1794～1870），メンデルスゾーン（1809～1847），ショパン（1810～1849），リスト（1811～1886）等でいずれもピアノ曲に多くの作品を残している．

シューマンの初期の作品は作品1から作品23まですべてピアノ曲であり「アベック変奏曲」Op.1（1830），「蝶々」Op.2（1831），「パガニーニの綺想曲による6つの練習曲」Op.3（1832），「6つの間奏曲」Op.4（1832），「クララ・ヴィークの主題による即興曲」Op.5（1833），「ダヴィット同盟舞曲集」Op.6（1837），「トッカータ」Op.7（1832），「アレグロ」Op.8（1831），「謝肉祭」Op.9（1835），「パガニーニの綺想曲による6つの演奏会用練習曲」Op.10（1833），「ソナタ第1番櫻ヘ短調」Op.11（1835），「幻想小曲集」Op.12（1837），「交響的練習曲」Op.13（1834），「ソナタ第3番ヘ短調」Op.14（1836），「子供の情景」Op.15（1838），「クライスレリアーナ」Op.16（1838），「幻想曲」Op.17（1838），「アラベスク」Op.18（1839），「花の曲」Op.19（1839），「ユーモレスク」Op.20（1839），「ノヴェレッテ」Op.21（1838），「ソナタ第2番ト短調」Op.22（1838），「夜想曲集」Op.23（1839）と彼のピアノ曲の大半を占めている．その中でソナタと数曲を除いてはすべて小品を集めた組曲で，現在も演奏される機会の多い名曲である．

1840年，クララ・ヴィークとの結婚した年からは歌曲の作曲へと移り，「リーダークライス」Op.24（1840），「ミルテの花」Op.25（1840），「リーダークライス」Op.39（1840），「女の愛と生涯」Op.42（1840），「詩人の恋」Op.48（1840）等の歌曲集を発表している．

1841年は交響曲，1842年は室内楽と音楽のジャンルがはっきり分れているのも興味深いが，彼の作品の大部分はピアノ曲と歌曲である．この中で興味をそそられる名曲「謝肉祭」の構成を分析してみたい．

1. 成　立

1834年，シューマン24才の時に書き始められて，1835年に完成している．後に彼の妻となったクララ・ヴィークは16才でもうすでにピアニストの道を歩きはじめていた．彼女の父親であり，シューマンの先生でもあったフリードリッヒ・ヴィークは多くの生徒を育て名声を博していた．その頃の同門に17才のエルネスティーネ・フォン・フリッケンがいた．この女性と婚約中（正式なものではなかった）であったが，彼女の父親の反対で結婚には至らなかった．「謝肉祭」の副題として「4つの音符でつくられた小景」とあるようにA，S，C，Hの文字はエルネスティーネに関係深い町，アッシュとシューマンの中にある文字をとって作曲されている．しかし，この曲の献呈は以外にヴァイオリニストのチャールス・リピンスキーにされている．

シューマンを語る時，クララ・シューマンを抜きにはできないが，「蝶々」Op.2を書いた頃指を痛めてピアニストの道を断念し，作曲や論評に専念していたシューマンを献身的に助けたのである．彼等の結婚もまた，クララの父親の反対で裁判にまでもち込み，1840年結婚したのである．「謝肉祭」もクララによって1837年小人数

＊児童学科

の前では演奏されていたが，全曲の公開演奏は1856年ウィーンで行われている．シューマンは「謝肉祭」を書いた頃，週間誌「新音楽時報」の創刊と大きな転期を迎えていたのである．その後クララは結婚生活14年の間に8人の子供を生み，シューマンの死後も演奏，作曲，教授，育児，シューマンの作品の校訂と超人的な働きである．しかし，はたしてすべてを完全に行った良妻賢母であったのであろうか疑わしい．

2. 意　　義

謝肉祭はカーニバルの邦語訳であるが，カトリック系ヨーロッパ社会で始まった年に1度の民衆的祝祭である．復活祭の40日前から4旬節が始まるが，その期間は肉を断つ習慣があり，その直前の3日から7日間の飽食と笑いの祝祭である．カーニバルの行事はグロテスクリアリズムと呼ばれる特別の言語，身ぶり，衣裳，過剰な装飾等を用い見世物や行列を広場街路で繰り広げる．起源的には仮面行列や張り子の偶像がつきものである．農山村では春を迎えて豊作多幸を祈る祭となり，都会では戸外における遊びとなり，張り子の偶像等を繰りだして楽しむ行事となっている．

このカーニバルは文学，美術，音楽の世界でも題材とされており，文学ではフランソア・ラブレーが「ガルガンチェア」，「パンタグリュエル」に，ゲーテが「イタリア紀行」に書いており，美術ではペーター・ブリューゲルが「謝肉祭と4旬節の戦い」に描いている．音楽でも数人の作曲者による作品が残っている．パガニーニの「ベネチアの謝肉祭」，ベルリオーズの歌劇「ベンヴェヌート・チェルリーニ」第2幕への序曲「ローマの謝肉祭」，サン・サーンスの2台のピアノを含む室内楽組曲「動物の謝肉祭」等があり，シューマン自身，もう1曲「ウィーンの謝肉祭の道化」Op.26においてウィーンで体験した謝肉祭の様子を描写した4楽章からなる作品を残している．

3. 構　　成

シューマンの「謝肉祭」Op.9は20曲（パガニーニを別に数えると21曲）から成る組曲である．各曲には標題を与えている．元来組曲は古典においてメヌエット，ガヴォット，ブーレ等の舞曲集であったが，シューマンは各々の曲にタイトルを付した小曲を集めて，関連性のある曲集としている．これ以前の「蝶々」Op.2も組曲であるが各曲にタイトルを付していない．「謝肉祭」と同じように各曲にタイトルを付した曲集には「幻想小曲集」Op.12，「子供の情景」Op.15，「森の情景」Op.82がある．

「謝肉祭」は副題として「4つの音符でつくられた小景」とあるように，A，S(Es)，C，Hの音名をほとんどの曲の動機に使っている．恋人であったエルネスティーネにゆかりのある町Aschからとっているが，「アベック変奏曲」Op.1の主題に使われているA，B，E，Gの音名もシューマンの女友達の名前である．初期のシューマンの作品はこのような音の遊びから発展させて，名曲を生みだしている．文学にも造詣が深かった幻想の作曲家らしい一面である．「謝肉祭」は「蝶々」の中の1節を挿込しているが，2曲共に舞曲的雰囲気をもつ曲が大部分である．

前に述べたA，S，C，Hの音は第8曲「応容」と第9曲「蝶々」にはさまれた「スフィンクス」に書かれた図1　譜例1の3つの音型である．

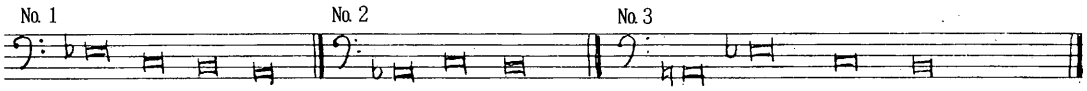
各曲の動機に使われたこれらの3つ型は次のようになる．

第2曲	No.3	（左手の始め）	譜例2
第3曲	No.3	（右手の始め）	譜例3
第4曲	No.3	（右手の始め）	譜例4
第5曲	No.3	（右手の始め）	譜例5
第6曲	No.3	（右手の始め）	譜例6
第7曲	No.2	（右手4小節目）	譜例7
第9曲	No.3	（右手の始め）	譜例8
第10曲	No.2	（右手の始め）	譜例9
第11曲	No.2	（右手の始め）	譜例10
第13曲	No.2	（右手の始め）	譜例11
第14曲	No.2	（右手の始め）	譜例12
第15曲	No.2	（右手の始め）	譜例13
第16曲	No.2	（右手の始め）	譜例14
第17曲	No.2	（右手の始め）	譜例15
第18曲	No.2	（右手の始め）	譜例16
第20曲	No.2	（右手の始め）	譜例17

全体に目を通していくと，始めの曲にNo.3の型を，中間から後の曲にNo.2を使っている．調をb系の調だけで書かれていることからNo.2のAsの音が中心になっている．

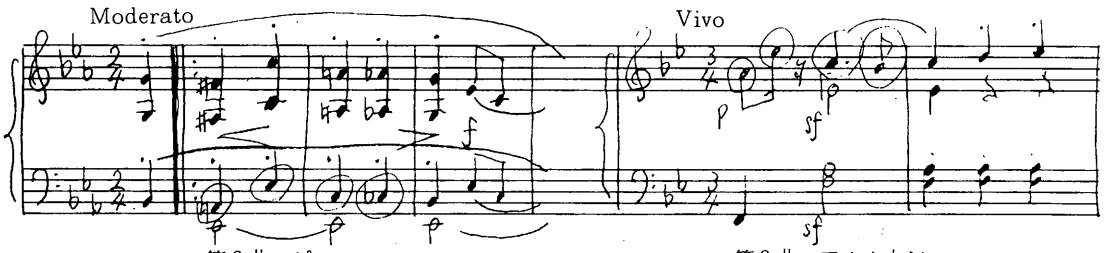
次に各曲の描かれている情景を述べてみたい．

第1曲　　前口上　Préambule



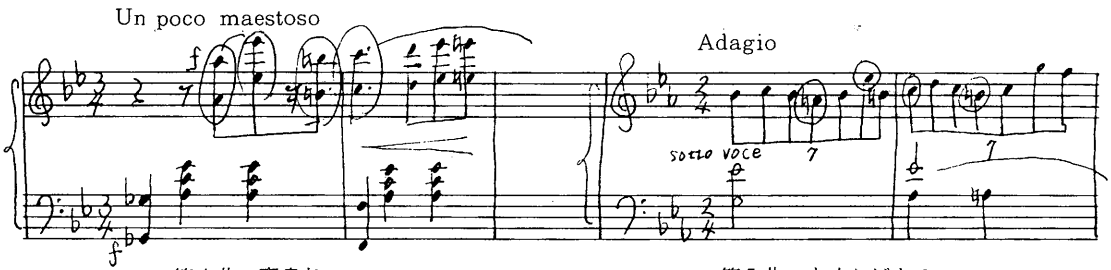
スフィンクス　3の型

図1. 譜　例　1



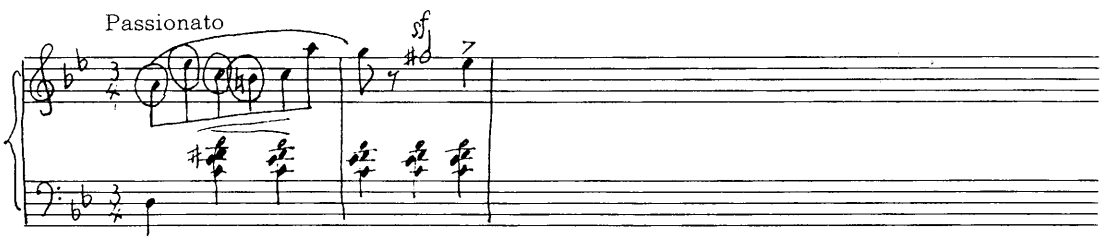
第2曲　ピエロ　　第3曲　アルルカン

図2. 譜　例　2　　譜　例　3



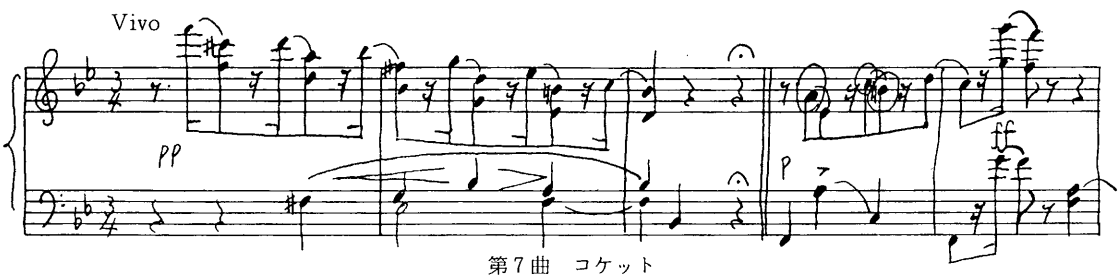
第4曲　高貴なワルツ　　第5曲　オイセビウス

図3. 譜　例　4　　譜　例　5



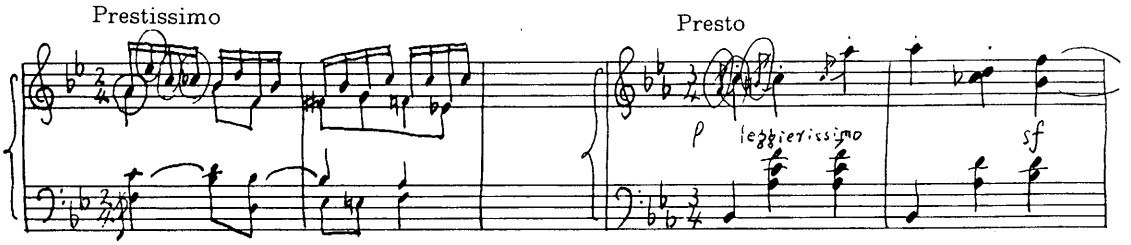
第6曲　フロレスタン

図4. 譜　例　6



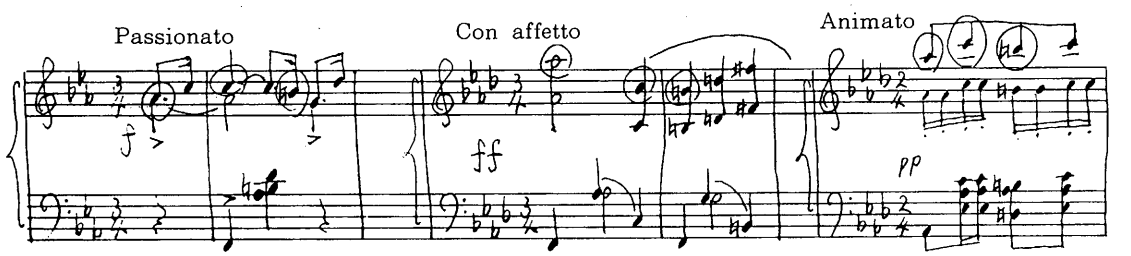
第7曲　コケット

図5. 譜　例　7



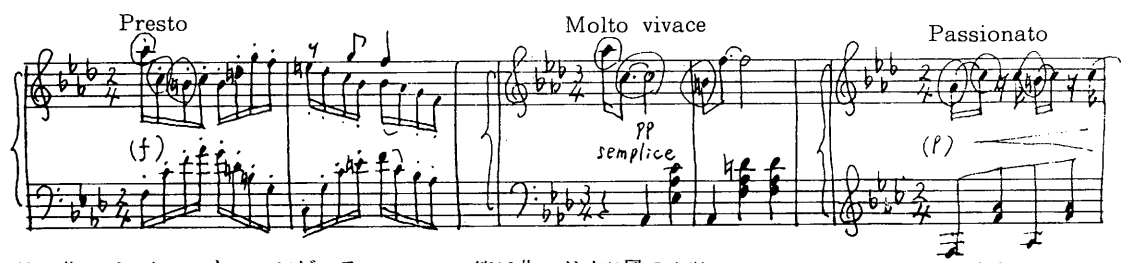
第９曲　蝶々　　第10曲　A.S.C.H. － S.C.H.A.

図6. 譜　例　8　　譜　例　9



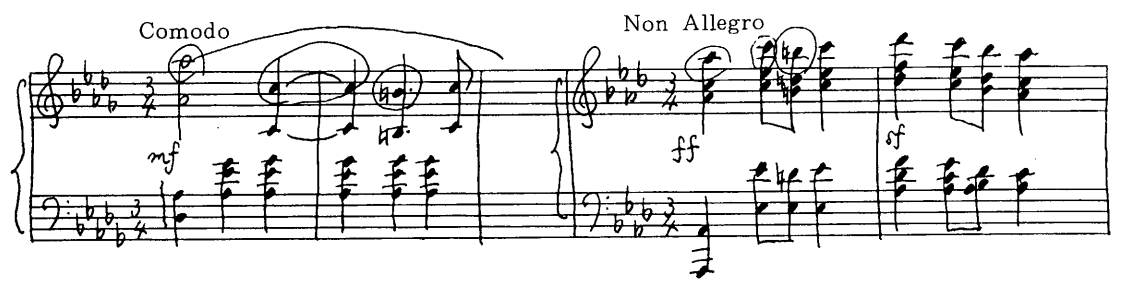
第11曲　キャリーナ　　第13曲　エストレラ　　第14曲　めぐりあい

図7. 譜　例　10　　譜　例　11　　譜　例　12



第15曲　パンタロンとコロンビーヌ　　第16曲　ドイツ風ワルツ　　第19曲　告白

図8. 譜　例　13　　譜　例　14　　譜　例　15



第18曲　プロムナード　　第20曲　ペリシテ人と闘うダヴィット同盟の行進曲

図9. 譜　例　16　　譜　例　17

3/4拍子　139小節

輝かしいファンファーレによって始められ，第1曲を飾る堂々たる序曲である．サーカスの会場，あるいは仮装の行列にあちらこちらから集まってくる人々，そして大きな集団となって通り過ぎていく様子を想像することが出来る．

第2曲　ピエロ　Pierrot

2/4拍子　50小節

大集団の去った後にひょこひょこと登場し，ころんだり，よたよたと歩くユーモアたっぷりの感じがでている．

第3曲　アルルカン　Arlequin

3/4拍子　34小節

道化の1人であるが，非常に生き生きと軽妙な曲であって，リズムに特色がある．全曲を通して♫♪♩.♪｜♩♩♩のリズムの繰り返しで，音域を上に下に移動して飛び跳ねる．

第4曲　高貴なワルツ　Valse noble

3/4拍子　40小節

太く息の長いメロディに始まるワルツである．中間部にやや，メランコリックな部分を挟んでいる．

第5曲　オイセビウス　Eusebius

2/4拍子　32小節

1834年6月10日のシューマンからクララへの手紙の中に書かれているように，後に登場するフロレスタンとオイセビウスはシューマンの2面的性格を擬人化して「音楽新報」等で音楽批評のペンネームとして使っている．オイセビウスは控え目で，冥想，抒情的な性格である．3連符，5連符，7連符の使用と右，左手の不規則なリズムを多用してデリケートで，うっとりとした感じをだしている．

第6曲　フロレスタン　Florestan

3/4拍子　56小節

テンポを一定させず，ritenuto，accelerandoを使って，前述のようにシューマンのもう1面である激しく，熱狂的，情熱的，直観的で行動性のある性格を出している．9小節目と19小節目に現われるAdagio部分は「蝶々」Op.2の第1曲目からの借用である．前作「ダヴィット同盟舞曲集」Op.6の中でも，既にフロレスタンとオイセビウスの2種類に分けて，各曲の後にF，Eの文字を書き込んでいる．

第7曲　コケット　Coquette

3/4拍子　60小節

媚を呈するという意味の言葉であるが，執拗に出てくる16分音符と8分音符がそれを表わしており，時折出てくるオクターブの強打がそれを遮る．途中に悩ましげな誘いが入る．

第8曲　応容　Repligue　スフィンクス　Sphinxes

3/4拍子　16小節

始めのメロディは前曲コケットの左に出てきたもので対になった曲である．

フフィンクスは音高だけを異った形の音型で書かれ，全曲を支配している音型のカタログである．普通，演奏されることは少ない．

第9曲　蝶々　Papillons

2/4拍子　32小節

自由に飛び交う蝶々の様子を右手に，左手にはquasi Corni（あたかもホルンのように）と指示し，ホルン5度を使い絡ませている．他の曲には「蝶々」Op.2のメロディを使っているにも拘らず，同名の曲とは云え，全く関係がない．

第10曲　A．S．C．H．－S．C．H．A．文字の踊り　Lettres dansantes

3/4拍子　32小節

全曲に関連のあるA．S(Es)．C．Hの音そのものの踊りである．位置をあちら，こちらに移して，最後には元に戻る．全体を支配するタイトルを持ちながら，やや簡単に終ってしまう感もある．

第11曲　キャリーナ　Chiarina

3/4拍子　40小節

クララのイタリア読みで，彼女に対する想いを訴えている．しかし，まだ結婚を考えるまでの深い関係ではなかったかもしれない．エルネスティーネとの間が正式な婚約でなかったとは云え，クララへの想いとか重なっていた時期である．

第12曲　ショパン　Chopin

6/4拍子　14小節

当時，作曲者でありピアニストとして有名であったショパンの演奏に感銘を受けて作曲された曲で，ノクターンを模して書かれている．左の分散和音にショパンらしいメロディを歌わせている．1835年秋に，ライプツィヒでショパンと会っている．

第13曲　エストレラ　Estrella

3/4拍子　36小節

恋人であったエルネスティーナを示している．短い中

に激しい情熱を表わしている．まだ，彼女への想いが強かった時期である．

第14曲　めぐりあい　Reconnaissance

2/4拍子　60小節

第1曲と終曲を除き，やや長めの曲で3部形式で書かれている．仮装舞踊会あるいは仮装行列の中で人達の再会の喜び，語らいの情景で，独立して弾かれてもまとまっている．

第15曲　パンタロンとコロンビーヌ　Pantalon et Colombine

2/4拍子　38小節

イタリア喜劇に登場する長ズボンをはいた，けちで好色なヴェネチア人と恋人である．右，左手の軽快な動きが2人一緒の登場を思わせる．中間部に感情の盛り上りが見える．

第16曲　ドイツ風ワルツ　Valse allmande
パガニーニ　Paganini

3/4拍子，2/4拍子　85小節

アルマンドは1550年頃，フランスに現われた2拍子系の舞曲であったが，18世紀後半頃，南ドイツ，スイスで3/4拍子の速めのテンポの舞曲となった．

この曲は三つの部分に分かれている．前後にアルマンドをおき，中間部が全曲中で最も難かしいテクニックをもつパガニーニである．ドイツ風ワルツの9～11小節はクララの作品「ピアノのためのロマン的ワルツ集」Op.4の中に，ほとんど同型で書かれている．1835年の作であるので同時期である．調は異っているがオクターブの連打，和音に類似点が見られる．中間部のパガニーニはイタリアの作曲家で，バイオリンの魔術師と呼ばれたバイオリニスト，パガニーニ（1782～1840）で，シューマンは1830年にフランクフルトで彼の演奏を聞き感動して，この跳躍の激しいバイオリン曲を模して書いている．彼は前にも「パガニーニの練習曲」Op.3を発表している．

パガニーニの曲のおわりにはシューマンによって発明されたペダル効果がある．前の和音のペダルのまま，次の和音を音を鳴らさないで弾き，ペダルをとり倍音による微妙な響きをだす方法である．

第17曲　告白　Aven

2/4拍子　12小節

全曲中，最も短い曲であるが，デリケートで切ない気持を充分に感じさせる．

第18曲　プロムナード　Promenade

3/4拍子　73小節

はっきりとしたメロディに対して陰になるメロディが付いていて，何組かの語らい歩く姿を描きだしている．

第19曲　休憩　Pause

3/4拍子　27小節

第1曲の途中に出てきた形で，素早く通り過ぎて行く．休憩のタイトルからは想像できないスピード感のある曲で，あまり思い入れをせずに奏する終曲への前奏である．

第20曲　ペリシテ人と闘うダヴィット同盟の行進曲　Marche des Davidsbundler contre les Philistins

3/4拍子　283小節

終曲にふさわしい壮大な曲である．だんだんと速度を上げ，たたみ込むように終る．

ダヴィット同盟とはシューマンが幻想的に考える友人の結社で，モーツアルト，ベートーベン，シューベルト等を同盟と考えている．ペリシテ人（フィリスティン）は音楽上の保守派あるいは俗人達を考えているが，これは旧約聖書のサムエル記上の故事から考えられたものである．この曲でも49小節からと146小節からの数小節に「蝶々」Op.2の終曲が登場する．舞踊会あるいは行列の全員集合の感があり，前口上の部分も顔をだす．

全曲中，最も長大な曲である．

全体の調は変イ長調が最も多く7曲，他は変ロ長調，変ホ長調，変ニ長調と数曲の短調である．拍子は3/4拍子が13曲と最も多く，舞曲集であることを示す．次に2/4拍子が6曲，6/4拍子が1曲である．

おわりに

ショパンやリストと同時代に生き，それぞれ異った特色のあるピアノ音楽を発表していったが，シューマンは指を痛めてしまい，ピアニストを志したにも拘らず，作曲者，評論家としての道を歩み，クララの献身的な助けによりロマンの香り高い名曲を生みだしていった．

彼の初期のピアノ曲が詩的な小品の花園であったことが，次の時期に歌曲集の世界へと続いていった．同時に交響曲を書く意欲を持っていたが，この分野ではピアノ曲や歌曲ほどに秀れた作品を残していない．

「謝肉祭」Op.9は他の作曲家も含めても名曲に数えられるが，ピアノのテクニックの面からだけみると特に超絶技法と云う程でもない．詩心を持ち，各々の曲との

関連性，全体の統一感，繊細さと豊かな響きのコントラスト等，弾いていくほどにまとめる難しさを感じる．そこにはシューマンが自分自身の分身をも登場させた青年シューマンの夢と幻想の世界があるからである．

各曲の特徴をだすためにもテンポの設定は大切である．シューマンは速度標語あるいは発想標語の記入にとどめているが，次に私見としてのメトロノームの速度を示してみたい．

第1曲　前口上
- Quasi Maestoso　♩＝112
- Piu moto　♩＝192
- Animato　♩.＝72
- Presto　♩.＝88

第2曲　ピエロ
- Moderato　♩＝92

第3曲　アルルカン
- Vivo　♩＝192

第4曲　高貴なワルツ
- Un poco maestoso　♩＝120

第5曲　オイセビウス
- Adagio　♩＝52
- Piu lento　♩＝60

第6曲　フロレスタン
- Passionato　♩.＝80
- Adagio　♩＝80

第7曲　コケット
- Vivo　♩＝138

第8曲　応　容
- Listesso tempo　♩＝138

第9曲　蝶　々
- Prestissimo　♩＝138

第10曲　A．S．C．H．－S．C．H．A．
- Presto　♩＝184

第11曲　キャリーナ
- Passionato　♩＝138

第12曲　ショパン
- Agitato　♩＝144

第13曲　エストレラ
- Con affectto　♩＝192
- Piu Presto　♩＝200

第14曲　めぐりあい
- Animato　♩＝80

第15曲　パンタロンとコロンビーヌ
- Presto　♩＝116
- Meno presto　♩＝80

第16曲　ドイツ風ワルツ
- Molte Vivace　♩＝176

パガニーニ
- Presto　♩＝112
- Tempo I ma piu vivo　♩＝184

第17曲　告　白
- Passionato　♩＝60

第18曲　プロムナード
- Comodo　♩＝184

第19曲　休　憩
- Vivo　♩.＝92

第20曲　ペリシテ人と闘うダヴィット同盟の行進曲
- Non Allegro　♩＝104
- Molto piu vivo　♩.＝92
- Animato　♩.＝76
- Vivo　♩.＝84
- Animato molte　♩.＝80
- Piu stretto　♩.＝88

その他，曲の演奏効果を上げるためにaccelerando，ritenuto，ritard.，stringendo等の緩急をつける標語が多く使われている．これらの指示を忠実に弾き，個性的な，人の心をゆり動かすような演奏が出来るように精進したいものである．

参　考　文　献

前田昭雄：シューマニアーナ，春秋社(東京)，1983

ナンシー・B・ライク，高野茂：クララ・シューマン女の愛と芸術の生涯，音楽の友社（東京），1989

ハンス・ヨーゼフ・オルタイル，喜多尾道冬，荒木詳二，須磨一彦：ローベルト，クララシューマン愛の手紙，国際文化出版社（東京），1986

マルセル・ブリオン，喜多尾道冬，須磨一彦：シューマンとロマン主義の時代，国際文化出版社（東京），1983

最新名曲解説全集15独奏曲Ⅱ，音楽の友社（東京），1981

最新ピアノ講座8ピアノ名曲の演奏解釈Ⅱ，音楽の友社（東京），1982

名曲大事典，音楽の友社（東京），1985

大百科事典，平凡社（東京），1985

万有百科大事典4哲学，宗教，小学館（東京）1976

参　考　楽　譜

Robert Schumann：Carnaval op.9, C.F. Peters (Lipzig), 1957
井口基成，吉田秀和：シューマン集Ⅱ，春秋社（東京），1964
井口基成，吉田秀和：シューマン集Ⅲ，春秋社（東京），1960

Summary

Robert Schumann wrote many works in his younger days. One of them is Carnival which has 20 pieces. They were described various scenery by a motif of A.S.C.H. This report is written about meaning of Carnival, formation, and tempo.